

りびんぐらいぶず 平成29(2017)年 4 月第 1 号

澄浄歡喜(ちょうじょうかんぎ)

ご讃題

もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、他のもろもろの世界における衆生達が、无上なる正等覺に向けて心を起こし、わたくしの名を聞いて、淨信の心をもってわたくしを隨念するとして、もし彼等の臨終の時が到来したときに、すなわち心が散乱しないことのために、わたくしが比丘僧団によってとりまかれ恭敬されて(彼等の)面前に立たないようにあるならば、その限り、わたくしは無上なる正等覺をさとりません(サンスクリット本『仏説無量壽經』第十八願、藤田 宏達訳)

もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、無量・無数の仏国土における衆生達が、わたくしの名を聞いて、かしこの仏国土に生まれるために心をかけもろもろの善根をさし向けるとして、彼等が一無間[罪]を犯した者達と正法誹謗するという障礙に覆われた衆生達とを除いて一たとえ十たび心を起こすことによってでも、かしこの仏国土に生まれないようにあるならば、その限り、わたくしは無上なる正等覺をさとりません(サンスクリット本『仏説無量壽經』第十九願、藤田 宏達訳)

はじめに

「信心一つでお救いに与るんですよ」と云われてはみても、「では一体どうしたらその信心を頂戴できるんですか」との問いに対して、浄土真宗ではこれまで必ずしも、親切にご案内できていたとはいえません。

私たちは、唯今、仏説無量壽經を異本対比して頂戴する仕方で、0和上のご指導に与っております。そこから明らかになってきたことをご紹介しますこの問いに回答してみたいと思います。

信心とは何か

サンスクリット(梵)本第十八願は、弥陀三尊の臨終来迎を除けば、その柱になる部分は、「わたくしの名を聞いて、淨信の心をもってわたくしを隨念するとして」にあります。

「わたくしの名を聞いて」とは、十方世界の諸仏如来が讚嘆(咨嗟)なさる名号をお聞かせに与ること「聞名」であります。これは、縷々讚嘆(広讚)される名号の云われ本願成就の物語をお聞かせに与ることから名号そのものを称えて(略讚)お喚(よ)び声としてお効かせに与ることに亘ります。

実は、親鸞聖人は、聞は信そのものだと仰せになりました。(一念多念文意、註釈版聖典 p678)。

当時サンスクリット本があった訳でもなく、少なくとも本願成就文では「聞其名号信心歡喜」

と、聞名と信心を言葉の上では別々に表されているのですから、両者は等しいと見抜かれた親鸞聖人の宗教的直感は常人ではないものと驚きを隠すことはできません。

次の「浄信の心を以て」という部分が信心を表しています。「浄信」に当たるサンスクリット原語は、prasannacittā という pra- sad の過去分詞であり、samādhi (三昧) と一つにして使われたと云われる原語だと教わりました。

この語の第一の語義が、「心をしずめる、浄化する、心を澄淨ならしめる」という意味であり、第二の語義が、「喜悦する、満足する」という意味であります。

この二義を合わせて、無量寿經の漢訳編集者が「信樂(しんぎょう)」という語を当てられたと教わりました。

そうすると、文献学的には、「信」は prasada の忠実な翻訳ではなかったことが問題になります。「信」という意味は原語にはなかったのですから、原語に忠実ならんとするならば、願文では、願文では、「信樂」よりは「澄樂」、成就文では「信心歡喜」よりは、「澄淨歡喜」等とするのが妥当な翻訳態度だったと窺われます。

心が澄むようになることが大事

そうしますと、浄土真宗であれほど「信心一つ」が大事だと云って来たその「信心を獲得する」には、どうすればよいのか、従前見落とされてきた道行きが姿を現してきます。

それは、原義に立ち返って「心が澄むようになること」が大事だということになります。

ここまで来ると、体験的世界で見聞きする出来事にヒントがあります。

当院では、ご法座が近づくと、境内、中庭の掃除は坊守が担っていてくれます。掃除をしているとだんだん心が洗われて「楽しくなる」と坊守は申します。「喜悦、満足」という第二義は、「浄化する」という第一義の結果もたらされる事態であったことが分ります。

お釈迦様のお弟子様だった周利槃特は、覚えの悪いお弟子様でしたが、お釈迦様がお与えになった箒をたよりに「塵を払い、垢を除こう」と繰り返され、終にお悟り第一のお弟子様におなり遊ばしたことは余りに有名です。

掃除というプラクティスの繰り返しのよって心が澄んでくると本願力回向の働きは自然に飛び込んで来て下さることを見落としてはならないことかと窺われます。

天台好相行では、過去仏・現在仏・未来仏各千佛の仏名を称える苦行が課せられます。何時終わるとも知れず、終にお姿を仰がねば成就しないとする厳しい行の最中、夢とも現とも知れぬ中に行者はご本尊のお姿に見えたとお聞かせに与ったことがあります。天台好相行は自力行とは云え、最早自力の及ばぬところで他力がお姿を現されているのだと窺えば、浄土真宗に通じるものがあります。

昨年未の 教校での研究発表のいよいよ当日の朝方、楽しげに語らって下さるお方がいらっしやいました。めざめて、そのお方こそ誰あろう、ご指導に与った 和上そのお方だったこ

とに気付きました。そのような出来事は後にも先にも全くないことであります。

衆生は、夢の中で雑念から解放され仏の応化のお姿に見(まみ)えると云われますが、それは、朝方の夢の中では心が澄み切るからではなかったかと窺われるのです。

昔の方々は、夢告を靈驗あらたかなる出来事と捉えられました。

親鸞聖人の六角堂百日の参籠の九十五日目の暁に現れて下さった救世観音(聖徳太子の本地)は、まさにその典型であります。

聞名 澄浄 随念の聞名プロセスに戻る

ご讃題サンスクリット本第十八願は、「わたくしの名を聞いて、浄信の心をもって私を随念する」という部分が聞名ループの中核です。

ここでは、「浄信の心を以て」は、敢えて、「澄浄」と置き換えてみました。

「随念する」とは、諸仏如来の名号讃嘆のお姿に追隨して自らもそうしたいと想ってお念仏することを意味します。サンスクリットの原語では、anusmareyus、(スMRI、語根は smr)に当たります。藤田宏達先生の最近のご研究により、この原語「スMRI」には、口で称えるお念仏の習慣が印度古来から存在したと云われます。

備考：“anu”という接頭語には、基礎的、強める意味があり(Ref 山内得立氏の「随眠の研究」)英語では、“disposition”に当たる旨、大田祐慈先生より承りました。「自らもそうしたいと想ってお念仏する」は、そのニュアンスを取り入れて表現してみたものです。“be disposed to”は、“~したい気がする”だからです。

他力の念仏者(信心の人)を親鸞聖人は、諸仏に等しとほめ讃えられました。

既に信心を頂戴された篤信の行者は、諸仏に等しい。既に諸仏に等しい信心の人の後ろ姿に導かれて私達はお育てに与るのです。

信心の人のお称え下さるお念仏の姿に導かれ、私もまた心洗われ、自らもそうしたいと想ってお念仏をお称えする姿こそは、「聞名」「澄浄(信樂)」「十念(讃仰)」の「聞名ループ」そのものであります。み名を聞き、心洗われ、繰り返し随念するお念仏のうちに私達はお救いに与るのであります。合掌。

宗祖七百五十回大遠忌実行委員会四月九日十九時

仏教婦人会例会 三月十六日(日)十九時半より

花祭り&降誕会四月二十九日(土)九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内)〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥